The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「完璧なる妻」のイメージ : 「痣」におけるエイルマーの強迫観念
Author(s)	小久保, 潤子
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2001, 35, p. 51-65
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47919
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「完璧なる妻」のイメージ

――「痣」におけるエイルマーの強迫観念――

小 久 保 潤 子

ナサニエル・ホーソーンは数多くの興味深い短篇作品を残している。「痣」はその中でも、構成上の完成度の高さとストーリーの面白さから、批評にもよく取り上げられる作品の一つだ。物語の内容は科学者であるエイルマーが妻ジョージアナの左頬にある痣を除去して完璧な美女にしようとするという19世紀版美容整形の話と端的にまとめることができる。従来は完璧を求める芸術家的科学者としてのエイルマーという側面が注目されがちだった。しかし最近では、文化的歴史的観点から「痣」を考えるというのが主流になっている。本論では「痣」を19世紀における家庭の問題というコンテキストに照らして考察したい。

痣の象徴性について考えることは、この形象が物語の核になっていることもあり、避けて通ることはできない。だが今までは、エイルマーの視点(“It was the fatal flaw of humanity which Nature...stamps ineffaceably on all productions, either to imply that they are temporary and finite, or that their perfection must be wrought by toil and pain...”)を受けて「人間の不完全性の象徴」という抽象的解釈に留まることが多かった。1) しかし痣はテキストの中で「赤い手の形」という具体的形象を与えられている。ゆえに我々は痣の形象自体にもっと注意を払うべきであり、そうすることによって物語の新たな側面が見出せるのではないか。

フェミニスト批評家は、論点に違いはあるが、痣をジョージアナのセク

シュアリティに関連づけている。その一人、ジュディス・フェタリーは赤という色から、痣に女性のセクシュアリティを読み込む。"... one specific characteristic of the birthmark makes the connection (between Georgiana's birthmark and her sexuality) explicit; the hand which shaped Georgiana's birth has left its mark on her in *blood*. The birthmark is redolent with references to the particular nature of female sexuality..." (Fetterly 25). フェタリーは女性のセクシュアリティを「創造性」と結びつけ、エイルマーは女性の創造力への嫉妬から痣を取り、自らジョージアナを完璧な「作品」に創りかえ、自分が女性より上だという事を証明しようとした、と論じている。

90年代に入って、ジョエル・フィスターは文化的な観点から、より踏み込んだ痣の解釈を試みている。赤という色を女性のセクシュアリティと結びつける点ではフェタリーと同じだが、彼はさらに手の形象から "handwriting" を想起し、ジョージアナの左頬の手形の痣をホーソーンと同時代の女性作家たちの表象と指摘する。

> Female sentimental authors of the mid-century, like Georgiana, exercised "a sway over all hearts"...Hawthorne himself, seemingly stung by the book sales of women writers, wrote to his publishers in 1852 that he wished women "were forbidden to write, on pain of having their faces deeply scarified with an oyster shell"...Hawthorne may have *biologized* and thus disguised his professional anxieties about women who, by virtue of their publishing success, were threatening to gain (in his mind) the upper hand. (Pfister 36-7)

ホーソーンが同時代の女性作家に脅威の念を抱いていたことについては

彼の手紙等の検証から今までに研究者によって指摘されてきた。手の形象が当代流行の女性作家の文筆活動の象徴として読めるなら、そこからジョージアナの手の形をした痣の中に男性を凌駕する能力を持った女性、男性に制御できない女性、男性に反抗し、脅威を与える女性の象徴としての意味を読み込むことが可能となる。だが、手の形象と女性作家の hand-writing の関係についてのフィスターの指摘は非常に面白いが、テキストの検証を欠いているのが難点だ。実は「痣」においても意識的に手と書く行為が結びつけられている。エイルマーが書き記した想像力を交えた科学に関する書物は "a large folio from her husband's own hand" (126) あるいは、"The volume...as melancholy as ever mortal hand has penned" (126-7) と表現されている。手は作家およびその筆跡の代喩として使われることがあるが、このテキストにおいても両者のつながりはしっかりと織り込まれているのである。こうして(女性の頬にある)手の形象から女性作家を連想するフィスターの論にテキストからの補強を与えることができる。

さらに、ホーソーンの他のテキストにおいて、女性の持つ能力や脅威と結びつく時、手がどのように扱われているか見てみよう。能力があり、反抗的な女性といえば、『緋文字』におけるヘスター・プリンが真っ先に思い浮かぶ。彼女はピューリタンの権威(男性的権威)に背いて姦淫の罪を犯したため罰として姦淫を表す緋色の A の形をした布を胸に生涯つけることになるが、権威に屈服したのではない。彼女には卓抜した針仕事の才能があり、罪の印として与えられたはずの緋文字の布に素晴らしい刺繍を施す。"She possessed an art that sufficed...to supply food for her thriving infant and herself. It was an art...of needle-work. She bore on her breast, in the curiously embroidered letter, a specimen of her delicate and imaginative skill..." (57). ヘスターの針仕事はまさに手の能

力による反抗と言えるだろう。[2] 緋文字の意味も罪の印から反逆の印へと転化する。他にも男性に従順でない女性の例としてあげられる『ブライズデイル・ロマンス』のゼノビアは自分の置かれた状況に絶望し入水自殺するが、彼女の死体の手の形は神(男性中心主義)への抗いの形をとっている。"They (her arms) were bent before her, as if she struggled against Providence in never-ending hostility. Her hands! They were clenched in immitigable defiance" (217). さらに『大理石の牧神像』では赤い手と女性の反逆の関連が洗練された形で表象されている。卓越した絵の才能を持った挑戦的な女性ミリアムは、絵画の中で「男性に復讐を加える女性」"acting the part of a revengeful mischief towards man" (44) の姿を描いている。彼女の絵の中の女性は文字通り、「手を血に染めている」"woman's hand was crimsoned by the stain" (44) のである。このテキストにおいて、赤い手の形象は女性の反抗のイメージへと収斂していく。こうして、我々はフェタリーやフィスターのコンテキスト上の痣の解釈を踏まえた上で、「赤い手の形」にテキストに即して「女性の与える脅威」という新たな解釈を付与することができる。[3]

ジョージアナはこういった後の長編に登場する進歩的発想を持った女性達ほどにはキャラクターとして成熟してはいない。しかし、彼女のとる態度にはこれらの女性達の有する性質の萌芽が見られる。ジョージアナは一見進んで痣を取ってもらう従順な妻に見えるが、テキストを丁寧に読むと、彼女の反抗の一端を読み取ることができる。初めに夫から痣を欠点だと指摘されたときの彼女の反応はこう書かれている。"'Shocks you, my husband!' cried Georgiana, deeply hurt; *at first reddening with momentary anger,* but then bursting into tears. 'Then why did you take me from my mother's side? You cannot love what shocks you!'" (119 強調引用者) ジョージアナはまず第一に怒りを表現しているのだ。このこと

を念頭においておくと、その後に続く言葉も夫に対する批判の表現とも読める。また彼女はエイルマーによって妻の領域を逸脱する要素と見なされている知的欲求を後の長編の進歩的女性達と共有している。[4] このようにジョージアナは明確ではないにしても、夫に対する反抗の芽を内包した女性なのだ。こうして「赤い手の形」という形象が示しうる「脅威」という意味と、ジョージアナの痣は結合する。ジョージアナの痣は、人間の不完全性の象徴とは別の脅威、すなわち「女性が男性に与える脅威の印」としてエイルマーに迫ってくるのである。

では、ジョージアナの痣が女性の反抗の意味を内包するとエイルマーにとってどのような脅威となるのだろうか。我々は既に痣から読み取る意味を、人間の不完全性というエイルマー側の観念的解釈から、女性の反抗というテキストとコンテキストに照らした解釈へとシフトさせた。それに伴い、エイルマーが痣を除去する理由もその文脈に即して考えなければならない。エイルマー側の痣を嫌悪する理由の説明には重大な欺瞞が隠されている。注意しなければならないのは、エイルマーが痣を気にしだしたのは「結婚後」だということだ。"*After his marriage,--for he thought little or nothing of the matter before,*--Aylmer discovered that this (to regard the birthmark as a flaw) was the case with him" (120 強調引用者). つまり、結婚前はジョージアナの痣を「ほとんど、あるいは全く気にしていなかった」のだ。ここで、エイルマーほど完璧な美を求める人物ならばなぜ求婚時にジョージアナの痣が気にならなかったのだろうかという疑問が生じる。求婚時には痣が気にならなかったというのだから、「目に見える不完全性の印」(119)がジョージアナの美を台無しにしている、ゆえに痣を除去したいというエイルマーの主張は説得力を失ってくる。ジョージアナの痣は結婚前からあったはずだし、結婚後急に目立つようになったわけでもない。ジョージアナの顔に痣があっても、結婚以前で同じ家

庭の空間で生活していない時期なら問題にならなかったのだ。状況が異なると痣がエイルマーにとって脅威にならなかったならば、完全なる美を破壊し、人間の不完全さを示すという彼による痣の解釈を文字通り受け取ることはできない。エイルマーが痣を脅威と感じたのは、他ならぬ同じ家庭空間の中で生活する自分の妻の頬にあるからなのだ。つまり、ジョージアナの痣は結婚後、「家庭という空間」の中でエイルマーにとって初めて問題化したのである。

ウォルター・ハーバートは19世紀アメリカの中流階級における家庭での妻の立場についてこう言っている。

> Yet nineteenth-century family correspondence reveals that husband did attribute moral and spiritual superiority to their wives, even as they exercised masculine authority as head of the household...The sanctified woman gave her husband the power to take command of her....(Herbert 75)

19世紀において男性は自分の妻の救済者としての精神性を崇めたのであるが、それは妻によって自分の自己を称揚させるためであり、妻の精神性は夫を崇めることによって規定される。権威は厳然として男性側にあるのだ。妻は家庭にいて、外の世界で働く夫を癒し、夫に自分の能力を確信させる、いわゆる「家庭の天使」としての役割を果たす。"The religious power of the domestic angel redeems the self-made man in-the-making; she 'believes in' him as he wishes to believe himself" (同上 86). 夫にとっては、妻に自分の能力を盲目的に信じさせるためには、妻が自分の仕事内容について無知なほうが好都合である。というのも、妻が仕事内容を知ってしまったら、夫の能力に疑念を抱き、癒しの天使としての役割をやめて能力を称揚してくれなくなるかもしれないからだ。"Since 'the world'

echoed and magnified the structural conflicts of the self-made man, she must remain sequestered from it...if she is to help him sustain the delusion innate to his selfhood" (同上 86). 精神的に支えてもらうために、夫は妻を「社会」から隔離しておく必要があるのだ。5)

「痣」において、家庭空間および、そこでの妻の役割はどのようになっているのであろうか。このテキストにおいても、夫による妻の社会からの隔離という状況が繰り返されている。エイルマーによる妻の仕事からの隔離は、二つの段階を踏んでいる。まず彼は結婚後、二人の新居として職場とは別の場所に家庭の空間を設けている。仕事の能率を考えるなら、実験室のある建物内に新居を置いたほうがよかっただろう。それをあえて別の場所に家庭の空間を設けたところに、妻を仕事と無関係なところに置いておこうというエイルマーの意図が窺える。しかし「痣」に織り込まれた家庭の問題が浮き彫りにされるのは、隔離の第二段階においてである。

エイルマーは痣の除去を取り決めた後、実験の都合上、妻の状態を観察しなければならないので、妻を実験室のある建物に連れてくる。妻が夫の実験室のある建物に連れてこられたというのは一見、仕事の空間と家庭の空間が接近あるいは融合したかに見える。しかし実際は、この二つの空間の分離はこの隔離の第二段階でより鮮明になる。この段階での夫の仕事場の描写と妻の部屋の描写は明確な対照をなしている。エイルマーの仕事場である実験室の描写を見てみよう。

> There was a distilling apparatus in full operation. Around the room were retorts, tubes, cylinders, crucibles, and other apparatus of chemical research. An electrical machine stood ready for immediate use. The atmosphere felt oppressively close, and was tainted with gaseous odors which had been tormented forth by

the processes of science. (127)

これに対しジョージアナに与えられた部屋は以下のように描写されている。

The scene around her looked like enchantment...a series of beautiful apartments not unfit to be the secluded abode of a lovely woman. The walls were hung with gorgeous curtains, which imparted the combination of grandeur and grace that no other species of adornment can achieve; and...their rich and ponderous folds, concealing all angles and straight lines, appeared to shut in the scene from infinite space. (123)

妻に分け与えられた部屋は "boudoir" という単語で表現されている。「ブドゥワール」とは「婦人に与えられた優雅な小部屋」を意味する。確かに味気の無い実験室とは対照的に、ジョージアナのいる部屋は優雅なくつろぎの場になっている。エイルマーは昔実験室だった部屋をわざわざ改装してくつろぎの場に仕立てたのである。そして仕事に疲れたら癒しを求めて、仕事場とはかけ離れた雰囲気の空間であるブドゥワールにやってくる。無機的な仕事場とくつろぎの場としての妻の部屋という二つの空間の対比はあまりにもはっきりしている。このように、同じ屋根の下にはあるものの、エイルマーの仕事場とジョージアナの部屋は厳格に区別されているのだ。

こうしてジョージアナはエイルマーによって仕事場とは全く無縁のブドゥワールに隔離されてしまう。エイルマーのほうは妻の部屋を自由に訪れることができるが、妻のほうは部屋を出ることを許されていない。一度、夫の後を追って、ジョージアナが仕事中の実験室に行く場面があるが、エイルマーはそれに気づいて彼女をののしる。"'Why are you come hither? Have you no trust in your husband?' cried he, impetuously. '...

It is not well done. Go, prying woman! Go!'" (128) エイルマーにすれば「死者のように青白い顔をして」(127) 仕事をする様子を妻には絶対見せたくない。このいらいらした口調から妻によって仕事の内容を見られたことに対する動揺が窺える。妻に仕事内容を知られることに対するエイルマーの恐れは、一つのエピソードによって裏付けられる。ジョージアナは夫が自分の科学の理想と実験内容について書いた本を見つけ出し読むのだが、そこから読み取れるのは、「成功というよりは失敗」(126)、および人間による科学の限界の記録である。エイルマーは妻が自分の本を読んでいるのを見つけ、たしなめる："It is dangerous to you to read in a sorcerer's books,... Georgiana, there are pages in that volume which I can scarcely glance over and keep my senses. Take heed lest it prove as detrimental to you" (127). 何とか笑みを作ってはいるが、彼の表情は明らかに「不安と不快」を示している。失敗や限界の記録なのだから、妻に見られたくないのは当然だろう。エイルマーは妻に、自分の仕事に関して「何かすごいことをしている」と思わせる程度の漠然とした情報を与えておく必要はあるが、能力を称揚してもらうためには、仕事内容を詳細に知られることは有害にしかならないのだ。

エイルマーは妻には自分の能力を盲目的に信じ、尊敬することを要求しているのとは裏腹に、自身は自分の仕事に対して不安を抱いている。仕事場での夫の様子を見て痣を除去する危険性を察知し、正直にリスクを話してほしいと頼むジョージアナに対し、エイルマーは何とかリスクをカモフラージュしようとする。しかし後に続く言葉 "I have already administered agents powerful enough to do aught except to change your entire physical system. Only one thing remains to be tried. If that fails us we are ruined" (128) は、妻に言い訳しつつ、自身は自分の能力の限界を感じていて、実験に自信を持っていないことを露呈させる。自

分の能力に自信がないからこそ、妻による尊敬と励ましが必要なのだ。それゆえ、必死の形相で仕事をする様子を見ることによって、妻が自分の能力に対して疑いを持つことを恐れ、仕事場とは正反対の空間に隔離する必要があったのだ。

仕事内容に無知なまま、無私の尊敬と癒しを与える家庭の天使というのが、エイルマーが妻に望む理想のイメージだ。仕事に疲れたエイルマーがブドゥワールを訪れる箇所はこのことを簡潔に示してくれる。"'...But come, I have sought you for the luxury of your voice. Sing to me, dearest.' So she poured out the liquid music of her voice to quench the thirst of his spirit. He then took his leave with a boyish exuberance of gayety..." (127). この引用によってエイルマーが妻に何を要求しているかが明らかになる。エイルマーはこのように、くつろぎの空間で天使的な女性に仕事での疲れを癒してほしいのだ。優雅なブドゥワールに癒しの天使たる美しい妻、これがエイルマーの理想とする完璧な家庭空間のイメージといえる。だが、完璧な家庭空間のイメージを実現させるためには、ジョージアナの痣が邪魔になる。なぜなら、本論の最初のほうで見たように、「赤い手の形」はジョージアナが内に秘める夫への反抗の芽を前景化するからだ。エイルマーの抱くイメージでは、仕事に疲れて帰る場所にはくつろぎの空間と、癒しの天使たるべき妻が待っているはずだ。その妻に「赤い手の形の痣」という反抗と結びつき、男性にとって脅威となる印があってはならない。エイルマーにとって痣は完璧な家庭空間のイメージに、「暗い影」ならぬ「赤い影」を投げかけるのだ。エイルマーは確かに完璧を求める男だ。だから「完璧な家庭空間の中の完璧な妻」というイメージを破壊する(と思いこいでいる)ジョージアナの痣は、速やかに除去されなければならない。痣の消える瞬間、彼はジョージアナに "My peerless bride" (130) と呼びかける。これは彼が痣を取って(自分にとっ

て)完璧になったジョージアナをようやく妻と認めたということを示唆している。エイルマーは「完璧な妻」というイメージに強迫観念を抱き、強行に実現させようとしたといえる。

以上、家庭という観点から、赤い手の形をした痣がエイルマーにとって持ちうる意味について考察してきた。しかし、痣の意味とはそもそも決定できるものなのだろうか。この問題を最後に考えてみたい。物語の始めの方で痣の詳しい描写がある。痣の大きさといったら、「小さな二本の指で隠せるくらいの小さな小さな」(121)ものなのである。それ程小さいのだから、一見したところでは、どういう形をしているのかわからないはずだ。見る人間によっては「葉の形」と捉えたかもしれない。それをわざわざ「手の形」と断定するのは見る側(このテキストにおいては主にエイルマー)の認識の問題と関わっている。一つの解釈に固執するということは、いろんな形に解釈できる可能性のある対象の豊かさを否定してしまう。さらに痣の色合いに関してはもっと詳しい記述がされている。普通の状態のときは「深みのある赤」をしているが、周りの頬がばら色をしているため形ははっきりとはしていない。つまり、左頬に何か小さな赤いものがあるということ位はわかるが、その形象はよくわからないということになる。嬉しくて気分が高潮している時は血行が良くなり、頬がさらに紅潮するので、痣は最終的には見えなくなってしまう。言い換えると、幸福なら痣は見えなくなるのだ。反対に、気分が落ち込むと顔色が青白くなり、痣は否応なく目立ってしまう。つまり痣はジョージアナの感情の起伏に伴い、見えたり見えなくなったりする移ろい行く痕跡であり、絶対的なものではないのである。

このように、痣は形にしてもいろんな解釈ができるし、色にしてもジョージアナの様々な感情を表すことができる一つの意味に固定しえない痕跡であることがわかる。エイルマーの主たる過ちは、相対的で様々な解釈が

可能なものを絶対的だと思い込み、一つの意味に固定しようとしたところにある。そしてそれは、エイルマーがジョージアナの種々の性質を否定しようとしたことを示唆する。痣の形象の多様性はジョージアナの多様性であり、それが彼女自身が言うように("To tell you the truth, it has been so often called a charm that I was simple enough to imagine it might be so" (119).") 彼女の魅力なのだ。だが、エイルマーは完璧な天使のような妻かそうでない女性という二項対立的な女性のイメージしか持つことができず、完璧な家庭のイメージを破壊する反抗の象徴として解釈できる痣を抹消してしまうのだ。「完璧な妻」という一つのイメージに固定させることはジョージアナを殺すことに他ならない。

赤い痣を除去されて(多様性の象徴を抹消されて)、ジョージアナは完璧に青白い顔色の「完璧な女性」(130)にされる(殺される)。最後に語り手が言う「エイルマーが振り捨てた幸福」(131)とは、多様性を持つ一人の女性としてのジョージアナと作り上げていくはずのものだった。しかし、彼にとって「つかの間の状況」("momentary circumstance")=移ろい行く痣が強烈過ぎ、ジョージアナとの関係、ひいてはジョージアナ自身を破壊してしまった。エイルマーは皮肉にも、家庭の天使のイメージを追及して、実際の家庭自体を失ったのである。

註

1) 例えばロバート・ハイルマンは"Hawthorne could hardly have found a better symbol than the birthmark, which speaks of the imperfection born with man, with man as a race. Here is original sin in fine imaginative form" (424)といっている。

2) さらにヘスターは優れた刺繍の才能のおかげで、罪人の烙印を押されていたにもかかわらず、結構な収入を得ていたことがわかる。"By degrees, nor very slowly, her handiwork became what would now be termed the fashion....it is certain that she had ready and fairly requited

employment for as many hours as she saw fit to occupy with her needle" (58). 共同体の人々は彼女の罪を咎めつつも、能力を認め、仕事を依頼している。そして次第に人々の彼女に対する態度も寛大になっていく。ヘスターは手によって自分の置かれた立場に抵抗し、権威に反逆したといえる。

3) 赤にしても手にしても実に多様な解釈が可能である。『イメージシンボル事典』(アト・ド・フリース著、大修館書店) では「赤」の三番目の項目に「復讐、怒り」の意味があげられている。さらに「赤い手」は暴力、殺害、死の警告の象徴になるという。しかし後で論じるように一つの解釈を押し付けるのに疑問を投げかけるのが本論の趣旨である。

4) 後で述べるように、エイルマーは科学に関する書物を読んでいた妻をたしなめ、彼女の知的欲求をそごうとしている。

5) ハーバートはまた、ホーソーン自身、妻ソファイアが進歩的で活動的な女性達と交流するのを嫌っていたことを指摘している。"Nathaniel did not approve of Sophia's friendships with cultivated and independent-minded women and warned against their parties as harmful worldly distractions" (136). ホーソーンは手紙の中で妻を自分の管理下に置きたいという願望を示している。"...thou dost need a husband with a strong will to take care of thee; and when I have the charge of thee, thou wilt find thyself under much stricter discipline than ever before" (CE 15: 633). 彼もまた、妻を自分の支配下に置きつつ、自分の才能を確信させてくれる精神性を求めていたといえる。

Works Cited

Fetterley, Judith: *The Resisting Reader: A Feminist Approach to American Fiction*. Bloomington: Indiana UP, 1978.

Hawthorne, Nathaniel: *Blithedale Romance*. New York: W. W. Norton & Co., 1978.

---. *The Marble Faun*. New York: Penguin Books, 1990.

---. *Nathaniel Hawthorne's Tales*. Ed. James McIntosh. New York: W. W. Norton & Co., 1987.

---. *The Letters, 1813-1843*. Ed. Thomas Woodson, et al. Columbus: Ohio UP, 1984.

---. *The Scarlet Letter*. New York: W. W. Norton & Co., 1988.

Heilman, Robert B: "Hawthorne's 'The Birthmark': Science as Reli-

gion." Nathaniel Hawthorne's Tales. Ed. James McIntosh. New York: W. W. Norton & Co., 1987.

Herbert, Walter T: *Dearest Beloved: The Hawthornes and the Making of the Middle-Class Family.* Berkeley: U of California P, 1993.

Pfister, Joel: *The Production of Personal Life: Class, Gender, & the Psychological in Hawthorne's Fiction.* California: Stanford UP, 1991.

Reynolds, David S: *Beneath the American Renaissance: The Subversive Imagination in the Age of Emerson and Melville.* Massachusetts: Harvard UP, 1989.

Simith-Rosenberg, Carroll. *Disorderly Conduct: Visions of Gender in Victorian America.* New York: Oxford UP, 1985.

(大学院後期課程学生)

The Image of "Perfect Wife": Aylmer's Obsession in "The Birthmark"

Junko KOKUBO

"The Birthmark," one of Nathaniel Hawthorne's tales, can be read as a story of 19th-century cosmetic surgery. We will find the problem of the husband-wife relationship in the 19th century if paying attention to the red, hand-shaped feature of Georgiana's birthmark.

It is possible to interpret Georgiana's birthmark as a symbol of woman's defiance against man, considering the meaning of "red" in 19th-century culture and the image of "red hand" in Hawthorne's other texts.

Implying the meaning of defiance, Georgiana's birthmark becomes a threat to Aylmer, her husband, who obsesses with the images of perfect home and perfect (beautiful, obedient, and angelic) wife. Her birthmark, he believes, prevents him from realizing them since he imagines that it foregrounds woman's defiance against man. So he forcefully seeks to remove it, which leads to his wife's death.

In brief, her birthmark is a passing trace which alters its meanings in accordance with her emotions. But Aylmer bestows on it the only one interpretation "his wife's imperfection" and rejects her various characters. Ironically, however, he loses ideal home as a consequence of obsessing with the perfect wife.

キーワード：家庭（空間）　完璧なる妻　赤い手形　表象としての痣